
ある平和な地球防衛軍

あいにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある平和な地球防衛軍

【Nコード】

N4942D

【作者名】

あいちゃん

【あらすじ】

ある地球防衛軍の平和すぎる毎日。名前や部隊など音楽やってる人には馴染みが深いと思います。が音楽とは切り離して読んでください。完全にフィクションで名前を借りただけなので……。

秘密兵器

ヴォルフガング大佐の

今日のご飯はハンバーグ。

BGMはピアノ、クラリネットとヴィオラのための三重奏曲 変ホ

長調 K・498 (W・A・Mozart)

「平和ですね、大佐」

ピョートル少佐は言いました。

「肉は世界を救うのだよ、ピョートル少佐。」

「そうですね、大佐」

「ところでピョートル少佐。くるみ割り部隊が活躍しているそうではないか！」

「いえいえ、大佐の40番戦隊の方が活躍してるじゃないですか！」

「まああの部隊には秘密兵器“MATEKI”があるからねえ」

「そうなんですか！秘密兵器って・・・？」

「將軍には内緒にしとくんだぞ！」

「イエッサー」

ピョートル少佐、今日のおやつはチョコバナナパフェです。

BGMは交響曲5番1楽章 (L・Beethoven)

「ところでルートヴィヒ軍曹、“MATEKI”って知ってるかね？」

「ああ、モーツアルトのオペラですね！」

「違う違う、40番戦隊の秘密兵器だよ」

「ああ、聞く人皆幸せにする楽器ですね！」

「楽器なのか！？」

「そうですよ。40番戦隊のアントニン中尉が詳しいはずですよ」

「そっなのか！アントニン中尉を呼びたまえ！」

アントニン中尉ピョートル少佐に呼び出される。

BGMはスラブ行進曲（P・I・Tch aikovsky）

「お呼びですか？少佐」

「“MATEKI”について教えてくれ！」

「オラ、大佐に口止めされてるだす。」

「そこをなんとか・・・」

「無理だす・・・大佐に許可さ取っていただかないと・・・」

「まあまあコレでも・・・」

ピョートル少佐は銘菓「新世界」を渡す。

お菓子の下には大量のユーロが！！！！

「お・・・お主も悪だす・・・」

「けっけっけ」

「大佐には秘密だすよ。実はオラもよく知ってます」

「何だつて！！！！？」

「ヨハネス少尉に譲っていただいたものです」

「ヨハネス少尉！？どこにいる？」

「くるみ割り部隊だす・・・」

「え・・・」

ピョートル少佐、ヨハネス少尉を呼び出す。

BGMは交響曲第1番4楽章（J・Brahms）

「お呼びでしょーか、少佐」

「“MATEKI”とはなんだ？」

「へえ、モーツアルトのオペラでございます」

「秘密兵器だ！」

「ああ、白鳥部隊も使ってますよ。うちも先日導入したじゃないですか！」

「へ？」

「ほら、先日少佐が発注してたじゃないですか！」

「え？」

「ヨハン工房の最新兵器でタイタンと一緒に発注したではないですか！」

そーいえばそーだった気がしたピョートル少佐。

そんなことも知らない上官を持った可愛そうな部下たち。

そんな部隊から発注を受けたヨハン工房のセバスチャン。

今日のランチはグスタフ將軍とカルボナーラ。

BGMはマタイ受難曲（J・S・Bach）

「最近お宅からタイタンとMATEKIの発注受けましたよ」

「なんだって！」

「使用許可されたんですか？」

「いあいあ、そんなことしてへんで！」

「あらーごめんなさいね。売っちゃった・・・」

「タ・・・タイタンは私のお気に入り千人部隊専用の武器なのに・・・悲劇的だ！」

怒ってしまったグスタフ將軍。

至急ピョートル少佐とヴォルフガング大佐を呼びました。

BGMは交響曲第1番4楽章（G・Mahler）

「君たちは最近活躍しているそうだね！」

「いえいえそんな・・・」

「無許可でタイタンとMATEKIを使ってるからか？」

ピョートル少佐はビックリしましたがヴォルフガング大佐は静かに言いました。

「無許可だなんて・・・先日將軍が通達を出したじゃないですか！」

「そんなもん・・・あつ！」

BGMは交響曲第9番4楽章（A・L・Dvorak）

先日巨大で凶暴なサメ捕獲作戦にタイタンとMATEKIの使用許

可を出したのを

すっかり忘れていたグスタフ將軍。

お詫びに2人に銘菓ヴィシェフラドを渡したとき。

魔王

ある昼下がり、ヴォルフガング大佐は窓からクラリネット嬢を眺めていました。

「うーっ、彼女はカワイイなあ」

ぼーっとしていたらアントニン中尉が慌ててやってきました。

「大佐！大佐！將軍様より通達です！」

「何だつて！？こんな平和なときに・・・」

「そ・・・それが急ぎです・・・」

ヴォルフガング大佐は通達を目にした瞬間顔色を変えました。

「少佐を呼んでくれ！ピョートル少佐だ！早く！」

「は・・・はい！！！」

そんな時ピョートル少佐は一人部屋に引きこもりマインスイーパーをしていました。

もちろん、チョコバナナパフェを食べながら・・・。

「コンコンコンコン」

「誰だよ！？」

「アントニンだす！大佐が呼びだす！」

「大佐・・・またボクをいじめるのかなあ？」

「そんなことないだすよ！至急だす！急いでくだすい！」

ピョートル少佐は食べかけのチョコバナナパフェを流し込み部屋を出ました。

「大佐、お呼びでしょうか」

「ああ、少佐。先ほどグスタフ將軍から通達があったのだ」

「・・・どのような？」

「魔王ベドルジハがヴィシェフラド城にいるらしい。至急捕獲せよ」
「魔王ベドルジハ・・・一体どのような方で・・・？」

「俺もよく知らないがブラニーク付近で目撃されたのを最後に誰も見ていない」

「捕獲せよとのことなので、きっと邪悪な奴に違いありません！」

「そうだな・・・ところで少佐」

「・・・出動ですか？」

「もし手柄を取ったならグスタフ將軍に君の昇進を持ちかけてみよう！」

「えー！！いいんですか！？ボク頑張ります！」

そうしてピョートル少佐は白鳥部隊を引き連れてヴィシェフラド城へと向かいました。

ちなみにくるみ割り部隊は現在サメ捕獲作戦に苦戦しています。

ヴィシェフラド城は狭いので中に入るのはルートヴッヒ軍曹とピョートル少佐の2人になりました。

「なあルートヴッヒ軍曹、魔王ベドルジハを見たことあるか？」

「はあ、一度だけ・・・」

「何！？何処でだ！」

「ヴルタヴァシヨッピングセンターで幼い頃迷子になったときに助けていただきました」

「は！？」

「へえ、拙者、魔王は実は心優しいのかと・・・」

「しかしだな、今回は將軍の通達だ」

「何かの間違いではないかと、心底不安なんです・・・」

そんな会話をしていたとき隣にいかにも「デーモン」な格好をした人が現れました。

「あ！魔王！」

「嘘だあ！」

「ふはははは！私が魔王ベドルジハだ！」

「くっ・・・お前が魔王ベドルジハだな！」

少佐はとっさに眠れる森の薬をまきました。

ルートヴツヒ軍曹が眠ってしまった！！

「ふはははは！仲間を寝かせてどーする気だ！？ああん？」

「くそ・・・軍曹・・・」

先日の秘密兵器勘違い事件（秘密兵器参照）を恐れ
タイタンもMATEKIも持ってきていない少佐。
どうする？

「仕方がない・・・それでも食らえ！！！」

1812発のビンタを魔王に向かって打ち続ける少佐。

少佐の手もぱんぱんに腫れあがってくる・・・。

「だ・・・ダメです・・・悪い人ではないんです。」

軍曹の寝言です。

しかし気付いたときには魔王の顔はぱんぱんで意識を失ってました。
・・・。

捕獲、一応成功みたいです。

「これでボクも大佐になれるかな？えへへ！」

ピョートル少佐は捕獲した魔王を連れ、グスタフ將軍の元へと向かいました。

「グスタフ將軍。魔王ベドルジハを捕獲しました！」

「よくやってくれた！ピョートル少佐。さあ、彼を……って……」

「

顔がばんばんに腫れた魔王を見てグスタフ將軍は驚きました。

「ちょ……なんでこんなことなってるねん！」

「へえ、少々抵抗されたもんで……」

「え？何で？抵抗？」

魔王は言いました。

「だってこいつらウチに勝手に上がりこむんだもん……」

少佐は反撃します。

「勝手もなにも！占拠していたのはお前らだろう！」

將軍は言います。

「人の家にはピンポン押して入ろうよ……」

人の家？

「ヴィシエフラド城の家賃、老朽化につき値下げするよって伝えたくて、ここに連れてきてほしかったただけなんやけど……」

なんだって!？

少佐は驚きのあまり外れそうなアゴをおさえながら言いました。

「え……じゃあ、あの通達は……」

「ああやって書いたら面白いじゃん！」

とことん迷惑なグスタフ將軍。

いわゆる平和ボケってやつでしょーか？

お詫びにヴィシェフラド城の家賃を1年間無料にしたとさ。

「結局ボクは少佐のまま！？」

頑張れ、ピョートル少佐。

夢見心地事件1

ピョートル少佐、今日は一人でヨハン工房にお買い物。

「うーん、そろそろマンゴーオレンジパフェの季節だなあ・・・」

そんな時ピョートル少佐は棚の隅に置かれた埃をかぶった瓶を見つけました。

そつとその瓶を手に取ります。

夢をのぞこう!!!

とろんぼーーん

この薬は友達と半分こして飲むとお互いの夢がのぞけるよ！

ご注意

友情が壊れる恐れがあるのでご使用の際には十分にお気をつけください。

と書いてありました。

これを読んだピョートル少佐はニヤリと笑みを浮かべレジに持って行きました。

「いらつしゃああい。あ、アンタ。コレ買っちゃうの？」

レジにいたセバスチャンはピョートル少佐に言いました。

「ボクが何を買ったっていいでしょ！」

「んま。まあいいですけど・・・」

そうしてニヤリと笑みを浮かべたままピョートル少佐は帰っていきます。

真つ暗な自室でピョートル少佐は考えます。

ヴォルフガング大佐の夢ものぞいてみたいな・・・
もつと見てみたいのは將軍のだ。

しかし上官の夢をのぞくのはちよつと気が引けるな・・・
ルートヴィツヒ軍曹のは・・・しかし彼は優秀な部下だ。
ではアントニン中尉・・・彼はどこ出身なのか非常に気になる。
きつとヤツの過去は夢に隠されているはずだ！
よし！アントニン中尉にしよう！！！！

そうしてピョートル少佐はアントニン中尉を呼び出しました。

「お呼びですか、少佐」

「はっはっは、キミとお菓子パーチーがしたくてだな」

「それならルートヴィツヒ軍曹としてくださいだす。オラ忙しいだす。」

「そ・・・そうか・・・」

「では失礼するだす」

「ちょ・・・ちよつと待つてくれ！」

「何だすか？」

「せっかく来てくれたんだ。この特性ジュースだけでも飲んでくれ！」

「なんか紫色だすよ・・・？」

「高級グレープを取り寄せて作らせた逸品だ。是非キミに飲んでもらいたい」

「マンゴーの匂いがするだすよ？」

「高級グレープとはそのようなものだ。パッションだ！」

「はぁ。ではいただきます」

そうしてアントニン中尉は薬の入った液体を口にしました。

「おえ！チョコバナナ味じゃないだすか！！！」

「パッションとはそういうものだ」

「情熱間違い過ぎだす！」

そう叫びながら全部飲み干したアントニン中尉は部屋を後にしました。

「ふふふ、これで夜が楽しみだな」

ピョートル少佐も同じような液体を飲みました。

「おえ！カレー味だ！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4942d/>

ある平和な地球防衛軍

2010年12月31日03時43分発行